随筆

「コンボイ」で行くシナイ半島とイスラエルの旅

長嶺胃腸科内科外科医院
長嶺　信夫

1. はじめに

シナイ半島とイスラエルを旅してから２か月が過ぎた。エジプトでは「アラブの春」の政変後就任したモルシ前大統領派と反大統領勢力との抗争がますます激しくなり、とうとう軍事クーデターでモルシ氏は拘束され、ますます混迷の度を深めている。筆者は４月下旬から５月連休にかけ、カイロ経由でシナイ半島と緊張が続くイスラエルを訪問した。

2. 塵が散乱したエジプト観光地

関西空港からカタールのドーハ空港経由カイロ空港に着いた。当日はカイロ市内で１泊の日程であった。ホテルで落ち着いた後、夜までまだ時間がある。誰言うことなく、その時間を有効に使用してギザのピラミッドを訪ねることになった。カイロ市内を車窓から見学しつつナイル川を渡り、幹線道路からギザ市内に入る。ゴミゴミした路地をぬけ、やがて薄汚れた建物の間からピラミッドが見えてきた。ピラミッドに向かう道路沿いに細い川があり、川沿いには塵が散乱し、山積みになっている。その上で羽まで灰色に染まった白鷺（？）が塵をあさっていた。エジプト最大の観光地であるギザがこの惨状である。「アラブの春」の政変以来混迷が続くエジプトを象徴している現象であった。

3.「コンボイ」で行くシナイ半島

翌朝、スエズ運河のトンネルをくぐり、シナイ半島に入る。そこからスエズ湾沿いにモーセが人々の渇きをいやしたという泉に立ち寄った後、そのまま南下し、シナイ山麓の聖カタリーナに向かう予定であったが、３月にシナイ半島で武装勢力による外国人の誘拐事件が発生し、外務省の「渡航安全情報」で、シナイ半島に「渡航の延期を勧告」および「渡航の是非を検討して」と危険情報が出されていたため、南下ルートはとらず、シナイ半島を横断したあと、アカバ湾沿いに南下し聖カタリーナに至るルートをとることになった。

写真 1. 装甲車が先導する車列

シナイ半島の移動では、一部警察車輌が同行するとのことで、ジープやトラックに乗った警察官の同行を想定していたが、実際は装甲車が先導する警備、いわゆるコンボイ走行で、装甲車を先頭にツアーバスやタンクローリーが隊列を組んで進んだ。考えてみると、武装集団の襲撃には銃弾をさける覆いのない車輌では役にたたないのである（写真 1）。

4. 転びながらシナイ山に登る

モーセの「十戒」を知らない人はいないだろう。

夜半にシナイ山麓のホテルを出て、バスで登山口に至る。ツアーの半数は頂上（標高2,285m）まで徒歩での登山であるが、老いを自覚している家内と２人は７合目までラクダに乗って行くことにした。ところが、ラクダがまた大変である。乗ったことがある人ならわかることだが、ラクダの鞍が大変である。鞍の前後中央に、先端が握りこぶし状になった棒状の突起があるだけで特別の背もたれもなく、手綱もない。人間工学的に考えて「どうして改良しないのか」と思うほど、不思議でしょうがない乗物であった。おかげで、ゴツゴツした岩だらけの登山道の坂道を揺られながら登るラクダの上で、下腹部と腰部を強く圧迫されながら、振

り落とされないよう鞍の端を必死につかんでいた。7合目からは、ヘッドランプを頼りにした自力の登山であるが、小石混じりの岩だらけの登山道で、転びつつ頂上にたどりついた。

頂上で、御来光を拝む。辺りで巡礼に訪れた人々が賛美歌を歌っていた。年配者もいて信仰の偉大さを感じた（写真2）。帰りは、麓まで自力下山である。荷物がかさばるのでトレッキング・シューズを持参せず、少し狭いと感じていたズックを履いたのが悪かった。2時間の下山でつま先を傷め、10本中6本の爪床に出血して、痛みのため思うように歩けない。前方を見ると、かなりの肥満体の中年女性が幾人もすたすた歩いていた。老いを実感する登山であった。

写真2. シナイ山頂での祈り

5.「死海」と「マサダ要塞」「死海写本」

しばしば話題にのぼる「死海」で浮遊体験をした。面白いことに湖は塩が完全飽和状態になっているのであろう。海（？）底に手を入れると、直径1～3cmにもなった塩の結晶を手にいっぱい掬い取ることができた。金平糖のような形である。かじってみると、自然塩そのものの味わい深いものであった。持ち帰った塩は車のダッシュボードに入れ、菩提樹苑での作業時、時々かじっている（写真3）

死海に続いて、ユダヤ教徒がローマ軍に抵抗し、悲劇の死をとげた要塞都市「マサダ」、「死海写本」が発見された「クムラン洞窟」の展望台に立ち寄った。

「マサダ要塞」はローマ軍がエルサレムに攻め入った西暦70年頃のユダヤ戦争のとき、エ

写真3. 死海の浮遊体験

リアゼル・ベン・ヤイールに率いられたユダヤ教徒の熱心党員967人が最後まで戦いつづけ、籠城した岩山の要塞である。抵抗は2年以上もつづき、異教徒の辱めを許容しない人々は西暦73年、7人の婦女子を除き全員自決している。

現在もここでイスラエル軍の入隊宣誓式がおこなわれ、式の最後には「マサダは2度と陥落させない」という言葉で締めくくられているという。イスラエルを訪れる外国の要人が必ず立ち寄る場所と説明をうけた。遺跡の大きな岩山の上には、巨大な貯水槽や倉庫などがあり、ローマ軍が使用した「投石機」の直径40～50cmほどの岩塊が山積みにされていた（写真4）。

写真4. マサダ要塞の断崖

「死海写本」は1947年、迷った羊を捜索していた少年が洞窟を発見し、土器に入った羊皮紙の古文書を発見したといわれている。羊皮紙には「イザヤ書全巻」や「詩篇」を含む「旧約聖書」や「ユダヤ経典」などが含まれ、紀元前2世紀の写本といわれ、実物の古文書はイスラエル博物館の写本館に保存されていて見学することができた。ユダヤ戦争のとき、逃亡のために隠されていた巻物だけが、その後、日の目をみたのである。近くに、当時死海側で暮らしていた人々の集落跡が遺跡として保存されている。

6. 歩け、歩けのエルサレム市内観光

2日間にわたって旧約聖書や新約聖書に記載されている場所をまわったが、歩け歩けの連続であった。敬虔なユダヤ教徒、キリスト教徒が遠くはエチオピアや南米からも巡礼に訪れ、まるでお祭りである。訪問先の旧市街を見下ろすオリーブ山麓にある「ゲッセマネの園」で、樹齢760年といわれる8本のオリーブの古木に興味がひかれた。はるか昔から受け継がれてきたという（写真5）。

写真5. ゲッセマネの園のオリーブの古木

「ゲッセマネの園」は頻繁にイエス・キリストが訪れた場所で、弟子達と最後の晩餐を終えたイエスが、ゲッセマネの園に入り、この後におこる出来事を予感しながら、血のような汗を流しながら父なる神に祈り続けたと「ルカによる福音書」に記載されている場所である。

7. パレスチナ自治区（エリコ、ベツレヘム）を訪ねて

ツアーではパレスチナ自治区のエリコやベツレヘムも訪ねた。報道でみる自治区はエルサレムに比較しかなり貧しく、日常生活の住宅、土地も豊かではないと思っていたが、広い敷地に建つ邸宅は予想に反するもので、エリコにいたっては水資源に恵まれ、多くの果樹が栽培され、ベツレヘムは生誕教会を訪れる巡礼者や観光客のため、賑わっていた。

報道のとおり、エルサレム市街とパレスチナ自治区との境界には厳重な検問所がある。エルサレムと自治区をへだてる高い塀には、抵抗を示す多くのメッセージやパレスチナを象徴する絵画が描かれていた（写真6）。なかなか見事な絵である。

写真6. パレスチナ自治区境界の壁

8. 地雷原のゴラン高原

シリアとの緊張が続くゴラン高原にあるナハル・ヘルモン国立公園を訪ねた。ガリラヤ湖畔のホテルを出発し、「狭き門より入れ」「求めよ、さらば与えられん」などイエスの有名な語句（マタイによる福音書第7章）が語られたガリラヤ湖が見渡せる丘を訪問した後、国境方面に向かう。

進路を北東にとり、なだらかな丘陵地帯を進んだ。幹線道路の要所に軍隊が駐屯し、戦車が並んでいる。停戦ラインに向かうにつれ、道路わきに地雷を示す赤い標識が立っている。膨大な数の地雷を撤去するのも大変だが、何時戦場になるかわからない場所である。そのままにし

ているのが賢明と考えているようだ。

ゴラン高原は、もともとシリア南西部に位置するシリア領の高原であるが、1967年の第3次中東戦争でイスラエルがシリアから奪い取った戦略上の要衝である。ゴラン高原は平均標高600mでヨルダン川流域をみわたせ、豊富な水資源はイスラエルを潤す水源になっている。現在国連の停戦監視団が停戦ライン沿いに配置されているが、シリア情勢との関連で緊張が高まっている。

ヘルモン山の麓の公園では雪解け水が滾滾と湧き出て、透き通るほどきれいである。1時間ほど川に沿って下ると涼しいしぶきをあげる滝もできていた。川を下ってガリラヤ湖に灌いでいるとのことであった。

ガリラヤ湖畔のホテルで古の出来事に思いをはせていた。

「あぁ、ここでイエスは漁師のペテロと出会ったのだ」と（2013年7月記）。

ガリラヤ湖の湖底で発見され、復元された古代船。遊覧船に使用されている。